

## 寒山拾得

通りすがりの人が私を見て  
気が触れていると言った  
鏡にはよくある顔が映っている  
服もちゃんと着ている  
私の言葉を彼らは理解しない  
彼らの言葉を私は口にしない  
道を往来する人にお知らせする  
私を理解したいなら  
寒山に来られよ

寒山拾得(かんざんじつとく)は、唐代(618～907年)に実在したとされる二人の詩人、隠者、またはアナーキストである。彼らの言葉は詩集『寒山詩』に編まれ、千年以上にわたり読み継がれてきた。しかしながら、中国史上において彼らの名が正統の系譜に並ぶことは一度もなく、また中国古典文学にも主要な影響が見られない。

『寒山詩』がいかんにして成立したかについては諸説ある。最も広く知られているのは、閻丘胤(りよきゅういん)という人物が、天台山・国清寺の僧に命じて一卷に編纂させ、自ら序文を添えたとされるもの。ただし、その序文において、長く仰々しい肩書きと共に現れる閻丘胤自身、実在の記録はない。また別の説によれば、同じく天台山にいた除霊府という人物が、9世紀初頭に詩を三巻にまとめ、序文を添えたとも伝えられている。さらに、禅僧・曹山本寂(そうざんほんじゃく)による蒐集説とも伝わっており、編纂の経緯については定かでない。確かなのは、詩集そのものが現存しているという事のみである。

ふたり揃うと、空気は微かに波打った。彼らは何かを静かに分け合っていたが、それが何であるかを知る者はいなかった。声は小さく、不気味というほどではなかったが、誰も彼らがなぜ笑っているのかを知らなかった。ふたりの言葉は、竹や木の幹に、岩の表面に、村の人家に、祠堂の壁に書き散らされていた。それらは集められ、数えられ、のちに詩と呼ばれるようになった。

ひとりには庭に梅の木があり、家族と書、すべてを持っていたが、ある日、それらをすべて放って消え去った。ときおり寺の敷地に姿を見せ、残飯を漁って、また忽然と姿を山中に消した。もうひとり、高僧に拾われて寺に迎えられ、かまどの番をし、灰を掃いていた。その名は「拾い得た」ことにちなむというが、それは、むしろ「書き落とされた詩を拾い集める者」という意味を託された名かもしれない。

こうして伝えられた寒山拾得は、やがて絵画のなかでも表現される主題となった。しかし中国・宋代(960–1279年)には、山水や花鳥といった鑑賞性の高い主題が主流となり、宗教にまつわる人物像は、次第に絵画の中心から遠ざけられていった。画壇から追いやられた主題はやがて日本に伝来し、息を吹き返した。鎌倉時代を通じてその表現が根つき、室町期になると、画僧たちによって数多くの「寒山拾得図」が生み出される。

その際、頻繁に手本とされたのは、中国・元代(1279–1368年)の宮廷絵師・顔輝(がんき)の作品である。一双の形で描かれた二人の姿は、三日月型の目と口、ボサボサの髪、整った歯並び、そしてどこか妖気を帯びた微笑みをたたえていた。この形式は、後世の絵師たちによって、繰り返し剽窃され、変奏されながら伝えられていった。狩野派をはじめ、俵屋宗達、尾形光琳、白隠慧鶴、与謝蕪村、ブライス・マーデンなどといった名だたる画家がこの主題に挑み、近年では横尾忠則が、江戸中期の無頼の絵師・曾我蕭白(1730–81年)による寒山拾得図に深く魅せられ、その再解釈を試みている。これらの絵の中で、寒山は巻物を、拾得は箒を手にする姿で繰り返し描かれている。

さらにこの主題は、文学の領域にも深く浸透していく。松尾芭蕉、森鷗外、夏目漱石、芥川龍之介、井伏鱒二、岡本かの子からゲーリー・シュナイダー、ジャック・ケルアック、柄谷行人に至るまで、時代や文化圏を超えて数多くの文人が寒山拾得に関心を寄せ、詩や小説、評論の中でその名を言及している。

こうした文学と絵画に繰り返し現れる寒山拾得の姿は、すべて元をたどれば閻丘胤の序文を起源としている。しかし、最新の研究は異なる可能性を仄めかしている。「寒山」と「拾得」という名は、個別の存在した人物を指すのではなく、当時の詩僧や文人たちが緩やかに連なって形成した、一種のグループを表す名称だった。この名のもとに、人々はその時々の理想や幻滅、信念を投影していった。その結果として、生まれた二人の奇人のイメージは、その名の背後に隠された無数の声が時を越えて重なりあった、ひとつの詩的な共同体とも呼ぶべき存在となっていたのである。